

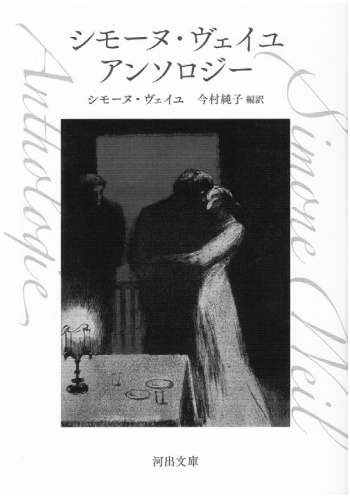
シモーヌ・ヴェイユ著、今村純子訳、
『神を待ちのぞむ』(河出書房新社、2020年)

おやさと研究所教授
金子 昭 Akira Kaneko

本書は、「須賀敦子の本棚」シリーズ全9巻(池澤夏樹監修)の第8巻として刊行された。須賀敦子(1929~1998)は著名なイタリア文学者・エッセイストであった。このシリーズは、彼女の思想の核になった作家・詩人・思想家の著作として刊行されている。ただし、読者は彼女の名前やこのシリーズの意味合いにとらわれずに、本書を読むことができる。ヴェイユの精神世界に入っていくためには、むしろそのほうが良い。

シモーヌ・ヴェイユ Simone Weil (1909~1943) は、第2次世界大戦のさなか、34歳の若さでロンドンに客死したフランスの哲学者である。彼女の精神世界が広く知られるようになったのは、彼女の遺稿を発見し、それを大切な「預かりもの」として我々の許に送り届けてくれた、友人の哲学者G・ティボンやペラン神父の尽力によるものだ。

本書は、ペラン神父による1950年の初版に基づき、ヴェイユ研究者の今村純子氏が新訳したものである。索引等も含めると500頁にもなる大部の書である。ペラン神父の序文に続き、ヴェイユの手紙6通(最後の1通にはペラン神父の返信がある)、そして有名な「神への愛と不幸」を含む5編の論考が掲載されている(本文部分は約320頁)。その後には詳細な訳註(90頁)、訳者解題及びあとがき(60頁)があり、監修者解説、主要文献一覧、ヴェイユ略年譜、索引(事項・人名及び神名)が付されている。



これに関連して、今村純子氏編訳の『シモーヌ・ヴェイユ アンソロジー』(河出文庫、2018年)がある。この本とも合わせて読めば、ヴェイユの精神世界の核心部分を捉えることができるので、こちらもお勧めしたい。

さて、本書を一読して誰もが気付く点がある。それは、ヴェイユを紹介するペラン神父の言葉とヴェイユ自身との間の不思議な距離感である。

『シモーヌ・ヴェイユ・アンソロジー』に近いと言えば近い。ヴェイユはカトリック教会の門口に立っているのだから。しかし遠いと言えばこれほど遠いものはない。ヴェイユは真理を教会の内ではなく、真理そのものの内に求めていたのだから。神父は、真理はカトリシズムにあると、教会の中から手招きをしている。ヴェイユもまた自らの内省の中で、洗礼を前にした「ためらい」を示している。

しかし、彼女の「ためらい」は、別の傾きにも大きく振れるものだった。ペラン神父と別れてイギリスに渡航した際、海の方角を指し、友人に笑ってこう語ったという。「もし、わたしたちが魚雷攻撃を受けて沈んだら、ここがすばらしい洗礼堂になるわよ」と。ペラン神父との意識のずれは、ヴェイユの最後の手紙、そして投函されなかった神父の最後の手紙まで、振幅する変奏を伴って存在している。

ペラン神父は、ヴェイユが「洗礼志願者」として亡くなったと、名残惜しそうに書いている。ヴェイユの良き理解者でありながら、彼が最後までそのような姿勢を取り続けたのはなぜだろうか。それは、「教会の外に救いなし」という排他主義的態度を取ってきた第2バチカン公会議(1962~1965)のカトリック教会をその背景に置いて考えると、よりよく理解できるだろう。

ペラン神父は、この枠組みの中から出ることができなかったのだ。第2バチカン公会議後、宗教間対話に熱心となり、包括主義的態度に切り替わった現代のカトリック教会においても、本音の部分は「教会の外に真の救いなし」という立場には変わらないが(それはどの宗教でも同様である)、もしヴェイユとペラン神父が現代に生きていたら、二人の精神的対話も大きく変わっていただろう。

だが、私はむしろ、当時のカトリック教会の枠組みの中にあるながら、教会とは関わりなくキリストの愛と十字架の意義を考えるヴェイユに着目したペラン神父の炯眼を高く評価したい。ヴェイユが教会の門口に佇んだように、ペラン神父もまた内側から教会の敷居まで歩み寄ったのである。

本書の論考中、最も宗教的で最も感動的なのは、「『主の祈り』について」と題された4番目の論考だろう。福音書の「主の祈り」のギリシア語原文を一行ごとに引きながら、ヴェイユは独自の読解を試みている。そこには教会も洗礼も出てこない。語られるのは父なる神、神の国、そして「わたしたちのパン」である。このパンはキリストを指し、天空に源泉を持つ糧である。眼差しは真っ直ぐにキリストに向けられ、そこからこの世を超えたエネルギーを受けることを目指している。実は、キリストは「わたしたちの魂のすぐ近く」にいる。そして、「わたしたちが同意するならば、キリストは入ってくる。だが、わたしたちが欲しくなくなるやいなや、キリストはすぐさま立ち去ってしまう」(294頁)。

これと似た言葉を、ヴェイユは2番目の論考「神への愛と不幸」の中で、より戦慄を覚えさせるような仕方でも語っている。「わたしたちが神の訪れに耳を貸さないでいると、神は物乞いのように何度もやって来る。だがまた物乞いのように、ある日を境にもうやって来なくなる。」これは何と恐ろしく響いてくる言葉であろうか。しかし彼女はすぐに続けて書き記す。「神の受け入れに同意するならば、神はわたしたちのうちに小さな種を蒔き、立ち去ってしまう。この瞬間から待つことを除いて神がすべきことは何もないし、わたしたちもまたそうである」(以上、194頁[『アンソロジー』では261頁])。「神を待ちのぞむ」という言葉に込めたヴェイユの万感の思いは、この文章の中に尽きている。

